

姫月に重ねて

(平成二十六年 度寮歌)

松元一平君 作歌
寺尾佳隆君 作曲

観月過ぎゆく晩秋の夜、穹蒼の天空高く舞ひたる月は今宵満つるかな。
その清輝に映えし姫が鏡水は、鹿が純瞳に宿らむ。
月影は鹿を誘ひ来たりしこの神無月に何をば見せむ。

一

時移ろひて人世は変われども
今宵も満月は我らを照さむ
夜の邪帳をはらはむと
流歩む汝は楡に似たれど
風流を掴まむ芽に感ず
風習に付和せし
狗と成らざらめや
さて映りこむ我が鏡瞳に
風習だに愛づるその気概

二

清澄みたる想ひ知る由もなく
今宵の三日月は川面に映らむ
かの日の月影とは違へども
人世に充つ解答を自ずと心得
此れは汝の求望にか
漲る想ひなどが劣らむ
さて映りこむ我が鏡瞳に
身を委ねばやその清流

三

静と唸りし雨霽したたれば
今宵も我は朧月を仰がむ
姫が麗姿を追憶ふべく
汝が想ひは涙と落流れ
透かし斜光にさらさるる
閉じなむ凌雲よこひ願はくば
さて映りこむ我が鏡瞳に
嗚呼汲まれたしその厭心
悲しかりけむ晩秋の夜は
月影映えて人影も追ひ得じ